

# 超古代の戦い ～最年少の巨人～

火野ミライ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

超古代から蘇り邪神の闇と怨念を打ち破り、人であることを望んだ「ウルトラマンティガ／マドカ・ダイゴ」

宇宙に進出した人類の障害の脅威と戦い、最後は戦士としてワームホールの彼方に消えた「ウルトラマンダイナ／アスカ・シン」そんな二人が活躍する遙か昔、超古代文明を闇から守るため、その時代の戦士達が戦いの日々を過ごしていた。現代とは違い、数えきれないほどの巨人が文明を守っていたのにもかわらず滅びた文明。

これはそんな滅びた超古代で起きた、戦いの歴史。

超古代に転生と言う形で生を受けた少女の軌跡。

目次

崩壊の始まり	1
光の巨人	9
人狂いの姉友	15

## 崩壊の始まり

あちこちで火の手が上がり、先程まで文明の象徴だった物は崩壊している。無事なのは遠くに見えるのと、ボクの後ろにある建築物。

「G A A A A A A ……」

二本の足で地を踏みしめ、荒々しい息を吐く巨体。尻尾は揺れ、その風圧で建物の瓦礫が舞う。鋭い瞳はこちらを睨みつけ、ボクを警戒している。

「……………」

小さな虫のように小さくなった人達いや、目の前の怪物と全長が同じぐらいになったボクを見上げ啞然と指をさす。

『……………』

目の前に佇む巨体。赤や紺の皮膚に岩石を思わせるディテール、王道的な怪獣シルエットに対してボクは両手を握り、記憶の奥底にあった構えを取る。視線自体は怪獣に向けながらも、変化した自身の肉体をチラチラと見てしまう。

パツと見は何かのスーツに思える色合いをしているが、きちんとした素肌。胸部辺りには守りとしての機能より、見た目を整える装飾に近いプロテクター。人間なら心臓が有る当たりに青く輝く発光部。巨人と呼ばれるシルエット。

長いことこの状態が続いているように感じるが、実際に目の前の怪獣とにらみ合う構図になったのは、ほんの10秒ほど前。事件の始まりは、1分経ってるか経ってないぐらいと思う。

まず最初に言うけど、ボクは転生者と呼ばれる奴だ。だからなんだと聞かれたら、何も言えなくなるから深読みでしないで欲しい。しいて一言言うなら、満足した人生だったと記憶している。

前世では男だったが今世では女として生まれた。最初は違和感ばかりだったし、男との違いに苦戦もしたが、その辺は若くしてこの世を去った両親に変わって育ててくれたお兄ちゃんや義理のお姉ちゃ

ん、幼馴染のおかげで何とかなっている。

そんなボクが暮らしている街だが、現代より優れていて優れていな。矛盾しているように感じるが矛盾はしてない。なんせ、良く創作物とかで出る超古代文明に生まれたのだから。

住めば都とはよく言った物。現代社会だろうが、超古代文明だろうが、住み慣れてしまえば大して変わらない。例えるなら、海外に移住するのと同じ感覚だ。移住した事無いけど。

前世で言う中学校の授業を終え、夕日が沈む地平線を眺めながらポーッと座っていたボク。そこに近づく一つの影。

「お待たせ！」

今年で15歳の幼馴染でボクより身長が少し高い少女《ルナ》、その妹で13歳の《フレア》の姉妹だ。彼女達を視界に入れたボクは立ち上がり、鞆を肩から掛け彼女達と共に帰路につく。

「それでね！」

いつも通り、たわいのない会話を広げるボくら。あの子とあの子が良い雰囲気だの、今日はこんな事を学んだだの、最近流行っている物とかホントに現代社会の学生と変わらない会話。途中、ルナとフレアが口喧嘩を始めてボクがなだめる。これもいつもじゃないが、普段の日常だ。

そろそろ二人と別れる道に差し掛かったころだった。突然激しい揺れに襲われのは……

「な、なに!?!」

咄嗟に近くにいたフレアを抱きかかえるボクの横でルナがパニツクに陥っている。周りに視線を向ければ通行人が、子供も大人も関係なくルナと同じようにパニツク良くて困惑していた。

それもそうだろう。なぜなら、ボくらが暮らすこの街は地震に襲われない土地にあるのだから。いや、地震自体はあるが、その影響を受けない装置がボクここに生まれる大分前に確立されており、地震の被害に遭う筈がないのだから。

オーバーテクノロジーの分、服がお粗末なのはこのさい目を瞑るが、地震と言う未知の災害に遭い辺りは混乱する。揺れが収まって直

ぐにフレアに目を向けると、ボクの服袖をめいっぱい握り締めていた。そんな彼女の頭を撫でながら、今だパニックになっているルナに声をかける。

「ルナ」

「やばいやばい！世界の終わりだ、今日で私の人生が終わるんだ。まだ初恋すらしてないのに！」

「ルナってば」

「もうダメ。私は死ぬの……」

「ルナ！」

膝から崩れ落ちたルナ。彼女の呟く言葉を聞きフレアも顔を曇らせる。そんな二人の姿を見たら無意識に声を荒げるボク。普段大声を出さないボクが、声を荒げた子に驚いたルナが残像が見えるぐらいの速度でこちらを振り向く。…首を痛めて無いか心配。

「色々思う事はあるけど、今は……」

言いたい事を押しとどめてフレアに視線を向けると、ルナもフレアを見つめる。視界に映るのはボクらの視線すら気にせず、ただ小刻みに震えている少女。再び視線をルナに向けると目と目が合う。どちらから何かを言う訳でも無いけど、同じタイミングで頷き合う。

お兄ちゃんより短く、お姉ちゃんより長い付き合いの幼馴染だからこそ、何も言わなくても通じ合う事が出来る。フレアを抱きかか彼女達の家に向かって走り始めたボク達。未だ不安でいっぱいになっている人達を放っておく事に何も思わない訳じゃないけど、今は自分達の手で精一杯だからと、足に力を入れる。彼女達の家に向かう理由はたった一つ、ボクと違って家で待っている彼女達の母親の安否確認だ。

下手したら、残酷な現実が彼女達を襲うかもしれない。それでも、分からないよりかは心の持ちようが変わってくるから。最悪な状況を何度も頭に浮かべながら、それを振り払う様に息が上がるのを無視してひたすら走る。そんな時だった……

「キャーーーーーッ!!」

広報からやけにクリアに聞こえた悲鳴。その声を聞いたボクは思



結論から言えば、ボク達は家に辿り着くことは出来なかった。

ゴルザが額から放つ超音波光線によって、目の前の建物が崩壊。そこから広がる火の手によって、道が塞がった。すぐさま別の道に向かうも気が付いたら、普段は現代言う自衛隊や軍隊によく似た組織によって、立ち入り禁止となっている森の中にいた。

『……………』

更に最悪な事に人混みに流される中、ルナとはぐれてしまい現在はフレアと二人きり。周囲を見渡しても花や木と言った植物だけで、人影は無い。前から何となく気になっていた場所だが、当然入ったことなどなく、土地勘のないので何処をどう通ればいいのかすら分からない。

『……………』

今の僕に出来るのは泣き崩れたフレアを優しく抱きしめることくらいだ。

吹く風は草花を揺らし、空では星が輝く。辺りには光源は無く、この森に住まう野生生物はゴルザに怯えてどこかに行ったのか、姿を現さない。

『……………』

光源が一切ないという事は、ゴルザからは距離を取る事が出来たという事。

野生動物の影や足音が一切聞こえないという事は、飢えた獣に出くわさないという事。

人影や人声が聞こえないのは、助けを期待できないという事。

『……………』

風が体温を奪う中、耳を澄ます。嫌と言うほど聞こえていた悲鳴は聞こえず、胸元で泣き続ける少女の声と風によって触れる葉の音、そして耳にこびりつく耳鳴り。せめて水の音でも聞こえればと思ったが現実はとことん厳しいようだ。

『……………』

ホントは焦らなきゃいけない状況なのだが、変に冷静になっている



……いや、諦めているんだと思う。いくらオーバーテクノロジーを持つている超古代文明でも、戦闘兵器に関しては現代の戦車や戦闘機を超えるものは無い。良くてなんかすごい固定大砲ぐらいだ。

「……………」  
日本人以上に平和ボケをしているぐらい、戦いと無縁の文明。険しい戦いが人の味を覚えた肉食獣ぐらいには平和化けをしている。そんな文明が怪獣<sup>ゴルザ</sup>に勝てるビジョンが一切浮かばない。

ゴルザが出るなら《ウルトラマン》も出て来いよ！と叫びたいよ。なんなら、一人なら叫んでいた。

「……………」  
そんなボク代わりに耳鳴りが大きくなる。……………と言うか、ボクを求めている？

なんとなく、そんな感じがして思わず立ち上がった。

「ヒックー……………リアお姉ちゃん？」

「……………」  
突然立ち上がったボクに困惑の表情を浮かべるフレア。それとは別に語り掛けてくる声。

フレアの手を取り、立ち上がらせ、声が聞こえてくる方向に向かって歩みを進める。

「……………」  
森の奥に行けば行くほど大きくなる声。時々フレアとはぐれて無いか確認しながら険しい森の中を進む。

「ふあ……………」  
「ここで待ってて」

辿り着いたのは遺跡の入り口らしき門とその奥に続く洞窟。咄然とするフレアに一声かけ奥に進む。光源が無いから真つ暗な闇が広がるがお構いなしに奥へと続く道を歩く。どうやら、整備どころか人の手が全くついて無い天然の洞窟のようだ。

「……………」  
ハッキリと聞こえてきた声。理解できない言語だが、ボクを導くような不思議な感覚。

温かくて、優しくて、安心する声。けれど力強くて、今にも消えそうなほど弱々しい声。

気が付くと自分の影がある事に気が付き足を止め、上を見上げる。何処までも広がっているかのように錯覚するほど暗闇が広がる中、青色に輝く宝石。宝石から放たれる光によって周囲が照らされているが、ボクが目に行くのは宝石が埋まっている壁……いや、巨人像。

体に模様が有るのがのが薄っすらと見える。それ以外は暗くてよく見えないが、これがウルトラマンの体た言うのは何となく分かった。

さつきから言っているウルトラマンはゴルザと言うキャラクターが出てくるシリーズであり、光の巨人の事を指す言葉。ほとんどが宇宙規模の今日に立ち向かう光の使者と描かれており、日本で製作されている特撮ヒーロー作品だ。

前世のボクはこの作品群に小さいころからどっぷりとハマっていた。だから知っている、この世界が後にネオフロンティアスペースと呼ばれるウルトラマンの世界の一つだと。この世界では人間同士の紛争が無くなった時代、人々は宇宙へと進出を始めようとするが、そこに立ちふさがる闇の支配者や宇宙に生きる高次元的生命体の数々。

そんな人類の盾になるかのように現代に蘇り、力を受け継いだ二人の光の巨人。それぞれが同じ悩みを持ちながら正反対の答えに辿り着き、未来へと進んだ。その物語はボクが今生きている時代から約三千万年後の出来事。この超古代文明は作品内で内乱で対抗する力も意志も失い、闇に滅びる。

だからどうした！

ボクはこの時代に生きている。血の繋がったお兄ちゃんがいる。これから義理の姉になるお姉ちゃんがいる。幼馴染がいる。妹がいる。学友がいる。無関係と言い張るには、見捨てるにはもう大切な物が多すぎる、だから！

「ボクを呼んだのはそう言う事なんだよね？」

目を瞑り深呼吸をする。すると先程の問いに応えるかのように、耳鳴りが聞こえた。

『力を君の手に！』

ゆつくりと腕を伸ばし、巨人像に触れる。その次の瞬間、ボクは光に変わり巨人と一つになった。

## 光の巨人

火の手が上がる街中を必死に駆け抜ける。後方では巨大な怪物が家や店を踏みつぶし、中央の城に向けて進撃。王都の戦士達が怪物に攻撃を仕掛けていいいるが効果は無く、怪物は気にも留めてない。

「フレア・リマ！」

私は逃げる人々の波の中からはぐれてしまった妹と親友を必死に探す。いくら視線を巡らせても、どこかですれ違った事のある大人やよく行く店の店員、知らない人ばかりで探し人の影も形も無い。

最悪な瞬間が脳内に浮かぶが、リマの事だ。きつとフレアと一緒に生きている。

そう思う事でなんとか平常心を保つも、後ろから来る確かな脅威に自然と目に水が溜まり、雫が頬をつたり地面へと溶け込む。

「ふざけんなよ！なんで私達がこんな目に……………」

妹の前では隠していた本音がついに零れる。

瞼から止めども無く涙が流れ、その場でしゃがみ込む。

「親父、お袋、フレア……………」

親父は今頃、王都の戦士としてあの怪物と戦っているけど、この状況が続けばきつと。

お袋はきつと私達を探して外に出ている。幸いな事に家からは距離が有るから最悪は無いだろう。

フレアは多分、リマに引っ付いていつてるよな。昔からリマ大好きっ子だし。

「リマア……………」

《リマ》

初めて会った時は親父につれられて彼女の家に行った時だ。その時の彼女は部屋に引きこもっており、必要最低限の事すらしているのか怪しいくらいに弱っていた。それこそその生きた屍の様に。

当時の彼女は王都批判の宗教団に命を狙われ、両親を目の前で失った。両親が彼女を守ったから。

だが宗教団はお構いなく、彼女に牙を向けた。王都の戦士が現場に

辿り着いた時には既に彼女は血まみれで気絶しており、ギリギリのところまで戦士が止めたそう。

その後、彼女は治療を受け無事に日常生活が出来るぐらいに回復した。けれど回復したのは身体で、心の方は全くのようで自宅につきしだい直ぐに部屋に引きこもったそう。

正直、まだ子供だった私は全部を理解できず、また妹が生まれそうな時期でもあったため、彼女の気持ちを考える事なく、只々初めて会った家族以外の子と遊びたがってた。と言うか、それしか考えてない。

そんな私は彼女の事などお構いなしに突撃したのは覚えている。正直、その後どうやって今の関係になったかは忘れたが、何度も彼女に怒鳴って無茶言って駄々こねて泣きついて甘えて……

悲しい時には何も言わずに傍にいてくれるリマ。妹の成長に共に喜んだりマ。

母親が病気で父が王都の外で仕事した時は、お兄さんと一緒に止まりにに来てくれた。お兄さんがデートしているのを発見した時は無理やり尾行に同行させたっけ……

「リマアア……」

膝に顔を埋め、彼女の名を呼ぶ。

『大丈夫だよ』

何時もどうりの優しく包み込んでくれる彼女の声が聞こえた。

思わず顔を上げると、入らずの森の方から一筋の光が夜空への浮かび上がり、そのままゴルザを吹き飛ばした。

「今度はなんだ!」「あの光は一体?」

光は徐々に巨大な人型を取り、巨人へと変わって行く。

銀色の赤色のラインが入った皮膚、鉄仮面のような顔に白色に輝く瞳? 胸には青く輝くクリスタルにV字を模った金縁銀色のプロテクター。額にはひし形のクリスタル。

「G A A A A A A A A A!!」

怪物が体勢を立て直し吠える。それをよぞに巨人はしゃがみ、こちらに光の玉をゆっくりと差し向ける。すると光の玉が独りでに浮か

び、私のそばにやって来た。

「フレア!?!」

光が晴れるとそこに居たのは逼迫した現状と真逆、安らかな寝息を立てて寝ている妹の姿。瞳に溜まっていた涙を服袖で拭い、フレアに近づく。

「フレア!フレア!!」

「う〜ん：？ルナ、目赤いよ?」

体を揺らし起こすと、寝ぼけた彼女の言葉が返ってくる。

そんな私達のやり取りを見守っていた巨人は立ち上がり、立ち上がり後ろへと振り向く。視線の先には警戒してい低く唸る怪物。巨人は両手を握り締めて構えを取る。

怪物と自信を観察する巨人。その様子に何となくだけど、普段着ない服を着せた時の彼女の困惑した様子を脳裏に浮かべた。

『アッシャー!』

巨人の掛け声と思わしき音が聞こえたかと思うと、巨人は怪物にタツクルを仕掛ける。突然動きを見せた巨人に反出来ず、もろに喰らった怪物は後退。巨人はチャンスと思いい追撃を仕掛けたが尻尾による反撃を受け、今度は巨人がもろに喰らい吹き飛ばされた。

前触れも無く始まった巨体同士の戦い。彼らの戦闘に介入する王都の人はおらず、私を含めた一般市民を含めて只々見つめる。

「G A A A A A A A A A」

『ハアー!』

怪物が額にエネルギーを溜めると、巨人が右手を顔の横に持つていきエネルギーを溜める。

巨人はそのまま腕を怪物へと向けると水色の光線を放ち、怪物も光線を放つ! 水色と紫色の光がぶつかり合い、相手の攻撃を押し出そうと力を込める。最終的に決着はつかず、小爆発を起こした。

今度は怪物の方から巨人に近づき、爪による一撃を放つ。巨人は腕の下をくぐり抜け回避し、横腹に蹴りを入れる。痛みに悶えながらも怪物は振り向きざまに頭突きを決めた。その一撃を正面から受け、後退る巨人。

『ウウウウ……』ティコン！ティコン！ティコン！……

互いに体勢を立て直し、激突！押し合いによる力比べ。勝負は体系通りで、巨人の方が押されている。巨人はうめき声をあげる中、胸のクリスタルが赤く点滅し始め警告音が鳴り響く。その姿はあり得ないけど、怪物を私達に近づけないようにしているみたいだと私は一人思う。

「G A A A A A A」

『グアアア……！』ティコン！ティコン！ティコン！……

自身の怪力を自慢するように吠える怪物、どこか苦しそうな声をあげながらも足腰に力を入れ押しとどめようとする巨人。あまりにも非現実的な光景に力なく座り込む人も出てくる。

「もうおしまいよ。」俺たちはあの化け物の争いに巻き込まれて死ぬんだ。」

中には泣き言を呟く人達。誰もが恐怖とか焦りより、今まで目にした事の無い膨大な力の前に絶望していた。私だってそうだ。地面へと座り込み只々、フレアを抱き寄せる。

こんな時、リマが居たら何をしてるかな？

何も言わずに胸を貸してくれる？もしくは私たち姉妹を抱き寄せる？この場のみんなが元氣付くような事を言うのかも……

『大丈夫、ルナさんは死なせないから。』

いや違う！ きつとあの時と同じで、目の前の脅威を遠ざけようとする。

たとえば自分がより危険な目に合うとしても。たとえば自分が死ぬかもしれない手段だとしても。

そこまで考えついて、思わず巨人たちへと目を向ける。

視界に入ってくるのは吹き飛ばされる巨人。胸の点滅が激しさを増すのも気に留めず立ち上がり、怪物にタックルを仕掛けて後退させた。

『ハーハーハーハー！』ティコン！ティコン！ティコン！……

すぐに距離を詰めて怪物の腹部に向けて連続パンチで攻撃していく。徐々に押されていく怪物と、死に物狂いで連撃を放つ巨人。巨人

の動きは素人それであり、親父やリマのお兄さんのようでもあった。

『……………テッヤ！』テイコン！テイコン！テイコン！

怪物を蹴り飛ばした巨人は腕を十字に組み、静かにタイミングを計っている。

怪物が起き上がった瞬間、足腰に力を入れなおしたかと思うと、白色の光線が右腕から放たれた。

その一撃を受け、強固な肉体を誇っていた怪物はあつという間に爆発とともに絶命。

「うっ……………！」

それを見届けた巨人は強烈な光と共に姿を眩ませた。

「消えた……………」

「俺たち、助かったのか？」

自分たちが助かった。その真実が人々に笑顔を戻していく。この瞬間、誰もが生き散ることに喜びを覚えていた。

……でも、この時はまだ知らなかった。

「……………」

人気の無い場所で倒れこんでいるリマ。どの額には誰が見ても異常だと分かるほど、汗をかいている。

——動き始めたリマの運命。

「君！大丈夫か!？」

起き上がる気配のないリマに気が付いたのは、王都の戦士に飲み切ることを許された若き戦士。自身の額から血が流れてもいるのにも関わらず、リマへと近づく。彼の声を聴き、ほかの戦士もこの場へと駆け付け、少女は運び出される。

——先の怪物は始まりの1ページにしか過ぎなかった事を

……

「k y a a a a a a a a a a a a a a a a !」

夜空が輝く中、無人島では巨大な翼をもつ赤き巨体が目を覚まして



いた。



全ての人間大好きって感じ。

過剰な程の他人主義な所があつて、見守っているだけでも心配になるぐらい。ちょっと前はそんなリマお姉ちゃんが好きじゃなかったし、ルナにも言わないような暴言を言ったりもした。それを聞いたルナが「リマに謝れ！」と怒りに来るのが当時ウザイと思つたが、あの時の私は既に黒歴史なんで思い出したくない。

話を戻して  
閑話休題

私がリマお姉ちゃんとよりを戻した出来事があつた。いつもテストの点数が良い私に言いがかりを付けて、殴つてきた人達からかばつてくれたんだ。リマお姉ちゃんは決して反撃の手を上げずに、私をかばい続けた。やがて血を流し始めたのを見て、同級生達は顔を真つ青にして逃げて行つた。

『どつちにも怪我して欲しくなかつたし……』

私が傷の手当てをしながら「なんで反撃しなかつたの？」と聞いた時、リマお姉ちゃんが返した言葉。思わず呆れた視線を向けたけど、当のリマお姉ちゃんは苦笑いを浮かべるのみ。同時に悟つた、リマお姉ちゃんの底なしの優しさに。そして以上までに狂っている事も。

ルナは気が付いてないけど、リマお姉ちゃんの家族であるあの人は感じていると思う。なんならお父さんやお母さんも気が付いている。

「離れてください」

額に汗を浮かべる看護師の人に言われて私達はリマお姉ちゃんから距離を取る。リマお姉ちゃんが運ばれたのは病院ではなく、現在避難場として開かれた城の一室。さっきの怪物で病院が崩壊した為、王様の好意で普段は入る事の出来ない王宮が貸し出されている。

リマお姉ちゃんが入つて行つた部屋を見つめていた私達は、小綺麗な服を着た女性に現在避難民の部屋として貸し出されている一室に案内された。王宮に集められた医師たちがリマお姉ちゃんを手術を受ける中、座つてはいるが頭の中はごちゃごちゃしている。

「どうしようどうしようどうしよう…… リマが目覚めないとかないよね？ 死んだりないよね？」

ルナにいったては私のそばを行つたり来たりして落ち着きがない。

周囲には年齢関係なく怪我をしている人、大切な人物の死を知り崩れ落ち涙を流す人、親を探して声を荒げる人、更には学校で同じクラス男の子が担架に運ばれる様子。

こうやって冷静に考えられる一方、ルナと同じくリマお姉ちゃんが死ぬんじゃないかと不安で泣きそう。それでも泣かないのは先程の出来事が頭に残っているから。

怪物から逃げるに必死でいつの間にかお父さんやお母さんに何度も入ってはいけけないと言われた森の中に入ってしまった。暗くて不気味な森で何か恐ろしいモノが出てきそうでリマお姉ちゃんの胸の中で泣き続ける私。

そんな時、リマお姉ちゃんはナニかに憑かれたかの様に突然と立ち上がり足元が見えない森の中を歩き始める。迷いなく真つ直ぐ歩くリマお姉ちゃんに手を引かれながら、何度も声をかけるけど反応を示さない。まるで別人のようになったリマお姉ちゃん。でも掌から感じる温もりはいつもと変わらない。

そんなリマお姉ちゃんの姿に困惑している内に大きな明らかに人の手が加わっている洞窟……いや、ドアが無い門が見えて来た。私を入口？において一人入っていくリマお姉ちゃん。私の制止する声も聞こえていないようで背中はどうんどうん見えなくなる。追いかけてうと思たけど、なにか変な感じがして無理だった。

それからしばらくして急に洞窟の奥から光があふれ出る。そして洞窟から溢れる光に包まれた私は何故か、この光はリマお姉ちゃんだと思っちゃった。そして気が付いたらルナが目の前にいて、怪物と巨人が戦っていたんだ。

私にはリマお姉ちゃんが巨人になったようにしか感じられなかった。ありえないのにどうしても否定できない。だって巨人が怪物の爪で切り裂かれた場所と同じ場所から血を流していたんだから…

結局、リマお姉ちゃんは一夜明けても目覚める事は無かった。けれども一命は取りとめ、今は病室代わりに使われている部屋でぐっすり眠っている。さつき大人の人から渡された湿った布でリマお姉ちゃ

んの身体を吹いていく私。今、この部屋には私とリマお姉ちゃんしかない。

本当はルナもこの部屋に泊まる気でいたみただけど、お母さんが心配なお父さんに連れられて行っちゃった。お父さんは王宮抱えの戦士で一部隊を率いている隊長。まだ仕事があるからお母さんをルナに託すしかなかったんだ。なのでこの場にはいないルナの分も看病する。

「なにこれ……？」

リマお姉ちゃんの身体を拭き終え、布を机の上に置く。その時、ここに運び込まれた時にリマお姉ちゃんが着ていた血まみれの服から顔を出す、不思議な物体が目に入る。手に取ってみると大人の人の手一つ分ぐらいの持ち手がある棒状の物が出てきた。

学校でちよつと見た昔の言葉が刻まれた金属、持ち手は大理石だったかな？そんな名前の石みたいな模様。持ち手より上の部分には煌めく宝石を保護するかのようなカーバー。重いけど軽い、そんな不思議な重みをもつ物体。

なんと表現していいのか分からないけど、とにかく不思議な物。こんなのリマお姉ちゃん持っていたっけ？ いやリマお姉ちゃんのと全部知っている訳じゃないけど、私の記憶では初めて見た。少しひんやりとしたステイックを手の中で遊ばせながら考えてみる。

……うん。リマお姉ちゃんにこう言うのを集める趣味もないはずだし、そもそもルナと違い趣味の物を学校には持って行ったりしない。だからたぶんあの森の洞くつで見つけた物なんだろう。そう結論を出し棚の上に置くと一先ず私も眠りに就くのだった。